ZOCALO 2015 6▸7

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

あなたが主役　企画展「動く、光る、目がまわる！ キネティック・アート」

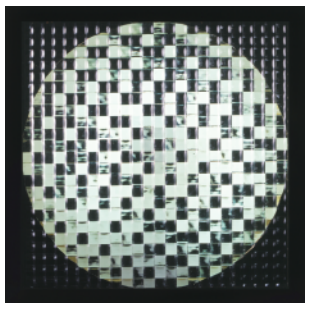
会期：2015年7月4日（土）～9月6日（日）

風景をぼんやりと眺めるとき、あなたの眼はどこに向けられますか。風にそよぐ草木、ゆっくりと姿を変えて漂う雲、きらきらと陽光を反映する水面など、視線は自ずと静止しているものより、動き、変化するものへと注がれるのではないでしょうか。乳児が動く玩具を見つめ手足を振ってはしゃぐように、動的な現象への関心は、私たちの本能に備わった原初の感覚と言えるかもしれません。

フランコ・グリニャーニ《波の接合 33》1965年
錯視によって視覚が揺さぶられる作品

「人間の感覚」と「動くもの」、この両者の関わりを探る作品が、1950年代後半から60年代にかけてヨーロッパを中心に盛んに制作され、それらは総称的にキネティック・アートと呼ばれています。「キネ」の語源はギリシア語の「動き」を意味することから、便宜的に訳すとキネティック・アートは「動く芸術」と言えるでしょう。ただし「動く芸術」は、機械仕掛けで動く作品とは限りません。光や色が変化したり、見る角度によってモアレや錯視があらわれたりする表現なども、動きを感じさせる作品と言えます。従ってキネティック・アートは、物理的な動きを伴う表現だけでなく、しばしばオップ・アート(オプティカル・アート)と呼ばれる、鑑賞者の視覚を揺さぶるような表現も含めて捉える必要があります。

ほぼ半世紀前に隆盛したキネティック・アートですが、その背景を探ると、芸術の根幹の問題に通じる論点が浮かび上がってきます。例えば、キネティック・アートの特徴として、事前の知識を必要とすることなく鑑賞できる点が挙げられます。伝統的に見れば、多くの美術作品は何らかのイメージを表わしており、図像学的なテーマや作者の内面など、前提となる教養や読み解くべき内容が介在しています。それに対しキネティック・アートの作品は、鑑賞者に直接的に作用し、鑑賞者の眼の中で今まさに起きていることを重視します。キネティック・アートは、知識を通して理解する作品ではなく、子供でも大人でも平等に体験できる作品を提唱したと言えるでしょう。


グラツィア・ヴァリスコ
《変化する運動130_チェスボード》
1962/69年
電気で発光しながら動く作品

ジョヴァンニ・アンチェスキ
《円筒の仮想構造》1963年
電気で動く作品

更にこの点は、作者の個性や主観性を排除する、もうひとつの特徴にも繋がっています。キネティック・アートは鑑賞者のその場での体験を尊重するため、解釈を必要とする作者の内面的な表現は敬遠され、客観的で即物的な表現が好まれました。そのため、当時のキネティック・アートの動向に関わるアーティストはしばしば、個人ではなくグループで活動しています。異分野のアーティストが集団で制作し、同時代のテクノロジーや知覚心理学などへの興味も示しつつ、社会に開かれたユニバーサルな表現を模索したのです。

イタリアのパドヴァで結成されたグループ
「グルッポN」1963年

時代的に見れば、個性や主観性を否定するこの傾向は、キネティック・アートより少し前に美術界を席巻したアンフォルメルの表現主義的な作風と対照的であり、そこに時代の転換を読み取ることができるかもしれません。また、キネティック・アートはユニバーサルな表現を求めたため、イデオロギーを超えて西欧だけでなく東欧や南米出身のアーティストも関わりました。この点でキネティック・アートは、戦後の早い段階でグローバルな展開を示した動向として捉えることができます。

今回の展覧会では、イタリアを中心としたキネティック・アートを紹介します。視線の向け方で作品の表情が移ろい、作品と鑑賞者の関係がダイナミックに変化するキネティック・アートは、理屈抜きに楽しめる作品です。ただし、見る側の世界を重視するキネティック・アートは、「見よう」とする鑑賞者の参加があってこそ、初めて成り立つ作品です。

もうお気づきのように、この展覧会の主役はあなた自身なのです。(I.H.)

写真提供(4点とも)：Centro Culturale Arte Contemporanea Italia-Giappone (ACIG), Parma

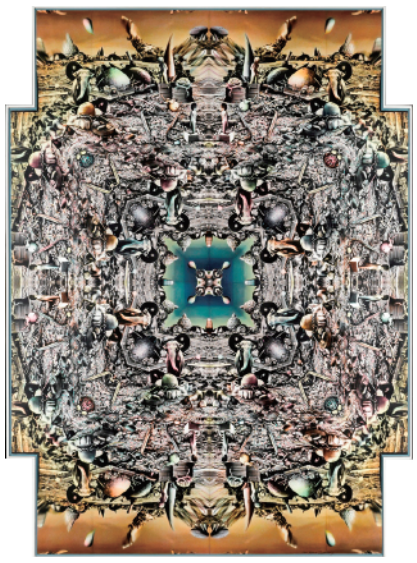
さくねんのたまもの　―平成26年度新収蔵作品のご紹介―

足かけ2年にわたる大規模改修工事を終えて、先頃、無事リニューアルオープンを迎えることができた当館。26年度後半の半年間は、移動展や出張授業などを除けば目立った活動ができませんでしたが、そんな美術館をしっかりと忘れずにいてくださった篤志家の方々からすばらしい賜りもの＝「たまもの」を頂戴することができました。

まずご紹介したいのは、埼玉県美術家協会会長・芸術院会員の塗師祥一郎氏から、1960年代の作品を含む3点をご寄贈いただいたことです。雪景で知られる塗師氏ですが、このモチーフに至る以前、まだ30代前半の作品である《陶土》（1963年）は、その後の画家のキャリアを理解する上での出発点となる貴重な作品です。収集の担当として塗師氏のアトリエにうかがった際に、「こうした初期の作品も評価されるのはうれしい」と話されていたのが印象に残っています。昨年度収蔵された塗師氏の作品は、「未来に遺したい埼玉の風景―塗師祥一郎展」において、近作20点とともに7月12日までご覧いただくことができます。

塗師祥一郎《陶土》1963年

県ゆかりの作家からはさらに、写真とコラージュのプロセスを駆使する出店久夫氏の大作2点、県北出身で現在パリで活躍する画家・原田宏氏の作品が1点寄贈されています。既に2点が収蔵されていた出店氏の作品が充実する一方、海外で活躍する県ゆかりの現代作家の作品収集はこれまで手薄だったため、原田作品の収蔵には大きな意義が認められます。


出店久夫《私風景'01―内接宙》2001年

難波田龍起《白夢》1969年

県内の篤志家の方々からは、日本画家江森天寿・天淵(てんえん)父子の作品や関連資料、日本的抽象を代表する画家である難波田龍起とその息子・史男の油彩・水彩、現代工芸を代表する県内在住の鍛金の作家・橋本真之氏の立体作品などのご寄贈がありました。江森親子は深谷市など県北にゆかりの深い画家で、当館では天寿の作品を既に3点収蔵しています。この天寿と父・天淵の作品に加え、天寿が東京美術学校入学以前に手がけた模写作品なども寄贈されましたが、これらは天寿を研究する上で大変興味深い資料となっています。難波田龍起9点・難波田史男1点からなる10点は、小品ながらも粒がそろっており、まとめて見ているとコレクターが作品を愛でる気持ちが伝わってくるような、そんな雰囲気がある大変良質なコレクションです。橋本真之氏の作品は、北浦和公園内にある《果実の中の木もれ陽》（1985年～）でおなじみですが、この度《作品211　発生期の頃》（1991-92年）という小品が寄贈されました。作品タイトルにある「発生期」という言葉は、作家の重要な制作コンセプトである「増殖・成長」とも関連しているので、橋本作品のより深い理解に今後役立ちそうです。

江森天寿《梅月》1922年

橋本真之《作品211　発生期の頃》
1991-92年

平成25、26年度に寄贈された作品の一部は、7月18日から始まるMOMASコレクション第2期「さいきんのたまもの」でご覧いただくことができます。どうぞお楽しみに！
(T.S.)

第65回埼玉県美術展覧会（県展）を6月2日（火）から24日（水）まで開催中！ 県展会期中は、MOMASコレクションの観覧料が半額になります。